

「私には関係ない？」 11月号 ～「こころの扉」を少し開いてみませんか～

被差別部落出身の詩人・丸岡忠雄さんは部落差別に対する思いを詠っています。

「ふるさと」

「ふるさとをかくす」ことを父は

けものような鋭さで覚えたふるさとをあばかれ

縊死した友がいた

ふるさとを告白し

いいなすけ
許嫁者に去られた友がいた

あこ
吾子よ

お前には

胸張ってふるさとを名乗らせたい

瞳をあげ 何のためらいもなく

「これが私のふるさとはです」と

名のらせたい

(詩集「ふるさと」より)

誰でも生まれ育った故郷がありますが、故郷を名乗ることで、仲間外れにされる、結婚を反対され

る、就職ができないなどといった、今も残る部落差別問題で、傷つき悲しむ人がいます。

私たちの社会は、部落差別問題をはじめ、さまざまな人権問題があります。その中で自分は当事者ではないから、自分が差別をしていないからという意識が知らず知らずのうちに誰かを傷つけてしまっています。今後も「私には関係ない」という意識でいる限り、差別問題は解決できません。

差別のない社会を目指すには、全ての人が差別をなくす当事者であることを意識することです。そして、部落差別は許されないものであるとの認識の下、私たち一人一人が自身の課題としてとらえ、解決に向けて努力する必要があるのではないのでしょうか。そのためには、正しい知識と人権意識を育むことが大切に

なります。自分のふるさとを隠すことなく暮らせる社会、偏見や差別のない社会、誰もが安心して暮らせる社会への一歩を進めてみませんか。

